

幕末明治の写真師列伝 第八十回 宮下欽 その二

佐久間象山がダゲレオタイプの写真術について、その知識を持っていたことは、1844年出版の蘭書、フォン・デル・ブルック著『Eerste Grondbeginselen der Natuurkunde』を、象山と交流のあった蘭学者黒川良安が訳述した『理学原始』を借りて読んでいたからと考えられる。また、後に『理学原始』を薩摩藩蘭学者川本幸民が、黒船来航に驚愕し右往左往する西洋科学の無知に対する啓蒙書として『遠西奇器述』を緊急出版している。

次に写真についての記録としてあるのは、文久3年7月22日(1863年9月4日)の小山岩次郎宛の書簡がある。「其後久しく御音耕も無之候故千万無心許存居候所忽御手簡此残炎にも愈御無事と承り致大慶候且過日は能く江府へも御一遊被成候よく定て面白きもの御携帰り御座候事と相察し申候御来訪の節御示し可被下候俵又金拾参両被遣遣に致落手候留影鏡も門人藤岡公用にて暫く京都へ赴き候等にて其後は屢も不試候はより次第涼気にも可相成候間御見合御一訪可被成候忙中勿々布復 七月廿二日 象山 岩次郎殿 書物一冊是又致落手候」

さらに文久3年7月25日(1863年9月7日)の大熊自謙宛の書簡には、「過日は登堂之所折あしく御不在不得拜眉遺憾之至に奉存候忽御投簡忙中拝見候へば御病氣も兎角御勝不被成其上今日は御歯痛にて御平臥とも申事散々に御座候此不揃の季候折角御保慎御座候様奉禱候俵又御内話に及び置候留影鏡の儀折節小布施門人穀屋岩次郎と申すもの参り合せ此もの元来西洋画法集居候処、此留影鏡にて天地自然の手本を製し之を学び候はばこれに増し候好手本有之まじくと相考へ達て欲しき趣申出て某迄半金差出し某と藤岡にて取入置藤岡にて所用片付器物閑暇之節借受度と申事故先前御話も申上置候儀に付此段御断御承知も被下候はば当人望に任せ度罷出候処不在故委細政君へ御話し申未だ御出金も不被下候儀に付可相成は其門人の方へ御譲り被下度と申上置候儀に御座候ひき然る処其次日も御沙汰無御座候名古屋商人も出府を急ぎ候義岩次郎に出金致させ道具引取候義に御座候然るに御話行違ひ金子拾五両御持せ被下候所全く前条の次第にて候故金子は其戻致還壁候三人御乗合も可然と御考御尤に御座候但岩次郎も帰宅不居合候義に付いづれ藤岡両人と申談し尚其上にて御沙汰可仕候先は忙中拝答まで草々以上 廿五日 大星拝 自謙兄下 過日の書款候様被遣遣に奉預候御風呂敷とも一両日中に是より完璧可申候」

「穀屋岩次郎」は象山の門人の一人、小山岩次郎のこと、小布施村の人で洋画を修得していた。書簡にある「留影鏡」とは写真機のこと。「門人藤岡」とはこれも象山の門人の一人で、松代藩士藤岡甚右衛門の長子で、山野奉行吟味役などを勤めていた藤岡伊織という人。大熊自謙はおそらく松代藩の家老大熊衛士(黨)の一族、大熊謙太郎(謙)のことと思われる。

この時に入手した写真機は文久3年という時期を考えれば、ダゲレオタイプではなくてアンプロタイプの写真機であろう。

さて、文久2年(1862)の話としては「幕末明治の写真師列伝 第十六回 下岡蓮杖 その十五」でもこのことは紹介したが、「久之助(蓮杖)が文久2年(1862)に横浜の弁天通りで開業した際には、太田陣屋(現在の横浜市日ノ出町1丁目の辺り)を統括する鈴木某という人が訪ねて来て、写真も撮り、その後もたびたび鈴木は久之助(蓮杖)の店に来るようになって、親しくもなった。この鈴木

という人は信州松代藩の人で、久之助(蓮杖)に自分の藩に佐久間修理(佐久間象山)先生という人がおり、この佐久間先生は大変な傑傑で、西洋の学問も勉強し、写真の原理についても研究されて、自分でも写真撮影を試みていたのだが、忙しくなってその時間も無くなると止めてしまったと久之助(蓮杖)に語った。「蓮杖先生の写真術が我国にあることを聞いたならば、佐久間先生も大変お喜びになるでしょう」と鈴木が久之助(蓮杖)に言うと、久之助(蓮杖)は以前に西洋人を撮影した際の写真を一枚、鈴木に渡して、「この写真を佐久間先生へ贈りましょう」と答えた。その後、この写真は鈴木から佐久間象山に贈られて、大変喜ばれたという。」という逸話がある。

鈴木は佐久間象山の門人であることから、象山の門人縁である『訂正 及門録』(『象山全集』などに記載)で調べてみると、佐久間象山の門人で信州松代藩の鈴木という人物は幸いなことに一人しかいない。この人は安政元年(1854)1月14日に象山に入門した鈴木熊次郎という人物である。この鈴木熊次郎が久之助(蓮杖)と親しくなっていたのであろう。以上の事から、幕末の松代藩では佐久間象山及びその門人たちが写真術に関心があったことがよく判る。

さらに佐久間象山の肖像写真としては、一般によく知られている片手で顎髭を握っている写真と、その他に正面向きの写真の二点がある。このことは色部貢編『象山先生五十年祭記念号』(松代青年会仮事務所、大正3年)所収、秋野太郎氏(注1)述「逸事教章」の、「寫眞鏡の事」に以下のように書かれている。「信濃教育会にて中村不折氏(注2)に託して画かしめし肖像は先生の写真によりしものなり、其の写真の原版は二通ありて皆大形のガラス取なり、今も佐久間家に伝へ常盤女史によりて保存せられ四十一年長野に共進会ありし時常盤女史持参せられ余も一見せり、旧式の湿法写真と云ふものがガラスの後に黒ピロードをあてて見るものなり、其一枚は髭を握れるもの一枚は然らざるものなり。世間にては此の写真は先生が暗箱(ルビは「カメラ」)を手製し薬品をも調査して自らピントを合せて後位置につき人をして蓋をとらせしものなりと話し伝え余もしか信ぜしが、象山全集下五五〇自謙(大熊氏か)に与ふる書によりて見れば、文久三年に暗箱を名古屋商人より買取りたる事明瞭にて、其年に撮影せられしならん、勿論先生が西洋に写真術ある事を知られしは遙か以前よりの事にて嘉永六年の横浜陣中日記にも、米人の写真するを見て其薬法につきて一二言話しかけられし事もあれば、薬法も已に多少は知り暗箱の構造も大要は知り居られしならんも今日に残されしガラス版程の手際を自製の機械にて得られしとは信じ難かりしが、果たして舶来の器にて撮影せられしなり。因に云ふ自謙子に与ふる文によりて右の器は二三人の共同にて買入れ代金は凡四十五両程のものなりしが如し。」(上記文中の「嘉永六年」は「嘉永七年」の誤り)

(森重和雄)

注1：秋野太郎は松代小学校長で、『あいさつ候文』(西沢喜太郎、明治40年)、『横田亀代子伝』(明治44年)などを書いた人。

注2：中村不折は、明治、大正、昭和期に活躍した日本の洋画家、書家で、太平洋美術学校校長。夏目漱石『吾輩は猫である』の挿絵画家として知られている。